

海外インターンシップ	
日本におけるラファエル前派主義	
江澤 美月	比較社会文化学専攻
期間	2009年12月13日～2009年12月31日
場所	イギリス
施設	The School of Oriental and African Studies, University of London
研修交流プログラム	an East and Southeast Asian History Seminar

博士論文では日本におけるラファエル前派の原型として19世紀イギリスのラファエル前派の政治性に遡及的に言及する予定である。その構想過程で数度にわたるフィードバック、特に日本研究部門を擁する海外研究期間においてそれが得られるならば、その効果は計り知れない。筆者は2009年3月本学学生の一人として、ロンドン大学のSOASで行われた共同ゼミに参加し発表したことがあるが¹、その際Japan Research Centre所長のDr Angus Lockyerから明治時代のラファエル前派主義の政治的インパクトを主張するには、更なる検証が必要であろうとの助言を受けていた。そのため本実習における発表はその応答を行うまたとない機会となった。

Dr Lockyerとの事前交渉の過程で上記フィードバックの重要性と、前回の発表の改訂版であることを強調した結果、12月15日の5時からSOASのan East and Southeast Asian History Seminarで40分間の発表を行うことが実現した。発表題目は“Pre-Raphaelitism in Japan: the Influence of the two Rossettis and their Dante Studies”である。当日はSOASの日本関係の学生の試験が間近であったこともあり、会自体は小規模であったが、日本の近現代史が専門のDr Christopher Gerteisと、近世史、特に江戸期研究が専門で前Japan Research Centre所長のProfessor Timon Screechから質問やコメントを得ることが出来た。

今回の発表ではラファエル前派の政治性を説明するために革命の推進者としての民衆の力に注目したが、そのことについてまずDr Gerteisから発表中に用いたrevolutionの語の意味について、イデオロギー的なものかとの質問があった。これに対しては、民衆の意思の総体としてのrevolutionと考えていることを強調した。その上でイギリスの場合にはイタリアの統一と独立を望む民衆の意思表示であること、また日本の場合にはラファエル前派主義を推進した

上田敏は明治期に江戸美学の復興を試み、その復興の支持母体として民衆を想定しているが、彼の考えの根底には、元禄期に文化の担い手であった民衆の存在があることを説明した。

次にProfessor Screechから日本におけるRaphaelの受容時期についての質問を受けた。当時は広く写真が流通する以前のことであるので、仮に上田敏が日本においてラファエル前派主義を主張したとしても、受け手側がRaphaelの絵画自体を知らないのであれば、どの程度活動の意味を把握できたか不明になるとの指摘である。これに対しては、Raphaelの絵の受容時期は未確認であるが、Rossettiの絵の場合書籍等によって知られていたと思われるので²、Raphaelの場合にも同様の可能性があると回答した。

併せて日本におけるDanteの受容時期についての質問があったが、これは筆者がラファエル前派の政治性を述べるために注目した民衆の力がRossettiのDante研究に見出せるとしたことに関連するものである。これに対しては上田敏の場合には明治20年代中頃からDanteを論じていること、またその他の例としては森鷗外の『即興詩人』にDanteに関する記述があること、さらにThomas Carlyleの*On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History*の中にDante論があるが、その紹介が初期の英語学習雑誌でなされていると回答した³。これに対してProfessor Screechからは、いずれにしても二次的な受容になるので今後の課題としてテキスト本体の受容時期も調査した方がよからうとの助言を得ることが出来た。

翌日はProfessor Screechの講演を聞く機会があった。近年徳川幕府がとった鎖国政策が海外特に欧米における江戸時代の評価全体に影を落としていると感じる場面が多かったが、そうした中で江戸初期のキリスト教の受容状況に目が向けられていたことは新鮮だった。

その後はthe British LibraryやVictoria and Albert

Museum 内にある the National Art Library 等において調査研究を行った。その中には予想外の繋がりが見つかることもあった。例えば Dante 研究者 Paget Toynbee は William Michael Rossetti と懇意であったが、彼によれば、William の父 Gabriele が自説の支援者である Tory 党の元外交官 John Fookham Frere へ献呈した Dante 論 Il Mistero dell'Amor Platonico del medio evo derivato da'misteri antichi (1840) は the British Museum に保存されている⁴⁾。今回の調査で同書は現在 the British Library の General Reference Collection 所蔵であること、また同書に添付されていた手紙から Toynbee 自身が寄贈したものであることが判明した。上田敏が『詩聖ダンテ』のなかで言及していることから Toynbee の研究は重要である。

滞在中にはラファエル前派を擁護した John Ruskin がその類似性を指摘した Turner に関する展覧会もあった。Tate Britain における企画展 *Turner and the Masters* では、Turner を従来のように改革者としてではなく、西洋絵画の継承者との視点から捉え直していた。なかでも興味深かったのは Turner が自身を Raphael に比していたとの指摘である。

なお本研究の成果の一部は「ラファエル前派の原点——Gabriele Rossetti の Dante 論をめぐる——」と題し日本英文学会で発表し、博士論文の中で更に論考を積み重ねる予定である。

註

1. Mitsuki Ezawa “Pre-Raphaelitism during the Meiji Period—A Trial to Understand Different Cultures—” お茶の水女子大学 大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成 21 年度 活動報告書 海外教育派遣事業編 平成 22 年 3 月 pp.181-185
2. 例えば 1885 年 London 発行の *The English school of painting* には東京図書館(現国会図書館)による「明治 20 年 10 月 27 日購求」の印が残っているが、同書の中には Rossetti の *Dante's Dream* のエッチングによる複製画がある。
3. カーライル「英雄及英雄崇拜」『日本英學新誌』第 25 号 明治 26 年 3 月 28 日
4. Paget Toynbee, Dante in English Literature: From Chaucer to Cary. Vol.2 (London: Methuen, 1909) 447.

えざわ みつき／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

江澤美月さんの本研究は、本プロジェクトが昨年度に企画したロンドン大学 SOAS での共同ゼミの成果を発展させ、そこで得た課題を追及したということで、本プロジェクトが担う通時的な学生支援の好例となっている。

江澤美月さんの研究の独創性は次の 4 点に要約できる。(1)ラファエル前派は、英文学研究においてはともすれば英国内の文化活動として局所化されて論じられがちだが、文化の側面から、それが国境を越えて相互に影響を与え合った軌跡を掘り起こそうとしている点、(2)ラファエル前派の芸術的側面の政治性をあぶりだして、近代国家成立の思想的同時性を追求しようとしている点、(3)日本の近代芸術／文学活動への影響を跡づけようとしている点、(4)近代日本の領地拡大政策・植民主義との関連の有無を検証しようとしている点である。今回は、(3)と(2)を中心に、ロセッティのダンテ研究に焦点を当てた研究成果を発表した。質問は日本における同派の受容の具体的局面についてのものが多かったようだが、日本での学問研究・文化理解を、それとはべつの文脈に翻訳して説明することによって、研究自体の深化が得られたと思われる。貴重な体験である。本研究は、日本における英文学研究の学会、日本英文学会の大会で今年(2010年)5月に発表できることが決まった。今後さらに練り上げて、博士論文のなかに有機的に組み入れられることを期待している。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 竹村 和子)